



乃木坂探偵事務所

彬原 希勇

装丁・イラスト 溝上 なおこ

目次

まえがき 4

第一話 ミステリー・ローズ 7

第二話 黒い鳩 73

第三話 前略 ろくでなし殿 123

第四話 夜明けのマリー 177

第五話 思い出語り 225

ちよつと休憩 【探偵小説の必需品】 120

ちよつと休憩 【キャラクターのお話】 222

【付録】 《素人作家の小説書き方教室》 266

推理小説と探偵小説の違いを考えたことがあるだろうか？ 謎解き物語の主役が探偵ならば、これは単なる屁理屈か。

しかし、わたしははっきり区別している。推理小説は数学で、探偵小説は社会学なのだ。謎解きは数学の方程式を解くことに似ていると言われ、この種のコンテストに入賞する人の職業はシステムエンジニアが少なくない。

昨今、テレビでこうした方程式的な物語を目にする。天才物理学者が主人公だったり、コンピュータのシミュレーションで犯人を割り出したり……。わたしは、とくにこの後者に疑問を感じた。ヒトの行動が、機械に分かるのか？ 一番重要なモノを見落としている。人間の感情だ。証拠物件や現場の状況がどうであれ、罪を犯すのは生身の人間である。と、しみじみ思い、探偵小説の出版を決意した。この作品「乃木坂探偵事務所」は、探偵小説の王道である。呆れるほどの正統派探偵小説と申し上げておこう。およそ10年の歳月をかけ、33話を書き上げた長編のシリーズ物だ。すべてお気に入りの自信作。大変苦勞しながら、5話を厳選した。推理小説との違いを、是非、味わっていただきたいと思う。

そのまえがきとして、記しておきたいことがある。物語の舞台は主に東京都心部だが、公園や建物などがフィクションの場合もある。とくに事務所の場所は、完全なフィクションだ。実際の乃木坂界隈に、主人公たちが暮らす空間は存在しない。また、登場する所轄名も同様だ。読者諸氏には大いに

想像を膨らませ、都会的な風景を頭に描いていただければ本望である。

もうひとつ。「乃木坂探偵事務所」は一話完結だが、33話全体を通して壮大なラブストーリーが語られる。その中から5話を選んだこの本では、多少書き直しても、愛情物語としてのレベルは下がってしまったことをお詫びしておく。

さて、かの金田一氏以後、日本のメディアに登場した名探偵は何人だろう。ふと考えても、ひとりふたりの名前しか浮かばない。もしかして、今や三頭身のアニメ探偵くんが、名探偵の代名詞になりつつあるのか？ もちろん、彼は人気と実力を兼ね備えた人物だが、「大人の名探偵」の出現を待ちわびるのはわたしだけなのか？

毎日、大小様々な事件が発生している。罪を犯す者は魔術師や天才学者ではなく、ましてや霊界の妖怪変化でもない。平凡に暮らす、ごく普通の人のなだ。少なくとも他人には、そう見える人だ。人間の心のヒダに潜む感情：欲望、恐れ、憎しみ、そして愛情。方程式やコンピュータシミュレーションでは決して解けない、生身の人間が織り成す犯罪模様を描いた物語が、この作品である。

それではページを捲り、正統派探偵小説の醍醐味を堪能して貰いたい。

第一話

ミステリー・ローズ

ガラスの向こうに、燃えるような紅色の風景があった。高層ビルの17階から望む夕暮れである。今までも、この時刻に少し視線を上げれば、これほど美しい風景がそこにあったのだろうか。まったく気付かず、ただひたすら、デスクの書類やパソコン画面を睨んでいた。しかも今日は、夕暮れを望む西側の窓際に、真っ赤な薔薇の花束を挿した花瓶が置かれている。空の紅色に薔薇の赤が溶け込み、なんとも美しくミステリアスな風景としてわたしの目に焼きついた。

わたしの名前は、小林むつき。声高らかに自慢したくなるほど、極めて平凡な男である。生まれてから今この瞬間まで、敷かれたレールを一度も脱線することなく歩んできた。少年期は決して両親に逆らわず、青年期も勉学に勤しみ、それなりの企業に就職して、42歳の今日までひたすら真面目に生きてきた男だ。特別ずば抜けた才能はないが、大手企業のがっちり固まった縦割り組織の中で、何の不満もなく二十年働き続けてきたことが、ある意味では才能なのだと考えている。

もちろん、悩みのひとつやふたつはある。このトシになって、まだ子宝に恵まれないことだ。三歳年下の妻とは見合い結婚だが、十八年目を迎えた夫婦生活がすっかり冷え切ってしまった原因は、子供、がないことだけだろうか？

ともあれ、夕焼けの空を背景にしたミステリアスな薔薇の目撃は、8月の蒸せるように暑い日であった。それまで、仕事中に窓の外を眺めることなど一度もなかった。しかし、このときわたしを惹き付けたミステリー・ローズは、四十二年間、真面目に平凡に生きてきた男の人生を大きく変える運命の予言だったのだ。

わたしの職場はカントリースピリッツという社名で、住宅の建築と販売を手掛ける会社だ。その

東京本店経理部販売課の課長代理が、わたしの職位である。

「伝田さん」

と、わたしは向かいのデスクの女性職員に声をかけた。

「安西部長は戻らないのかい？」

「会議が終わったなら、そのまま帰るとおっしゃっていましたよ」

「そうか…」

わたしは一枚の書類を引き出しに戻した。経理部長の安西和彦に見せて、内容を尋ねたいと思った書類だ。昨日の夕方、シュレッダー機の下に落ちていたのを発見したのだが、経理部で十三年働くわたしでも不可解な内容である。建築用資材の見積書でも、これを我が社に送ってきた会社の名前と住所に見覚えがない。カナダのフロンティアという木材会社だ。資材の調達先は国内と、海外は中国だけのはずだが…。しかし、見積書の宛名はカントリースピリッツ本店経理部の安西部長だ。そこでわたしのデスクの電話が鳴った。

「はい、経理部販売課小林です」

『やあ、むつき。久し振りだなあ』

実に馴れ馴れしい第一声である。思わずむっとしたわたしの声は、当然低くなった。

「失礼ですが、どちらさまですか？」

『俺だよ、塚田明。北校の同級生だ。忘れちゃったか？』

記憶の扉を開く名前だった。高校時代、同じクラスにいた男だ。しかし、特別親しかったワケでは

ない。同じ教室で学んでいただけであり、卒業後は一度も会ったことのない男が、いきなり何の用だ？

『実は、俺ときみが今年の同級会の幹事だ。知っていたかい？』

「いや、ここ数年、同級会には行つてなかったから…」

『それで押し付けられたのさ。俺も同じ。で、ちょっと会つて打ち合わせしたいと思つて電話したんだ』

「ああ、そう…」

『急で悪いんだが、今日はどうだろう？』

アフターファイブの予定など何もない。生ビールを軽く1杯やり、我が家へ帰るだけだ。妻は今夜も出かけていて、戻りは夜中になるだろう。だからその誘いは、今だに顔を思い出せない相手であるうと、断る理由がなかった。

すぐに仕事を切り上げ、そそくさと退社である。女性職員たちは、わたしが消えるのを待っていたようだ。出て行くわたしの耳に、彼女たちのヒソヒソ話が聞こえた。

「安西部長つて、最近残業しないわよね」

「どうも、真つ直ぐ家には帰つてないらしいわよ」

「愛人がいるつてウワサ…」

「そうそう、でも、あんなハゲおやじのどこがいいのかしら」

「お金よ。それしかないでしょ」

さて、夜の闇は上空から舞い降りるはずだが、大都会は違うようだ。ビルの谷間のアスファルトからせり上がり、ネオンサインを誘い、高層ビルの上へと昇っていく。茜色の空と薄闇の大地。まだ真

昼の熱を残すアスファルトにはヒトやクルマが行き交い、まるで竜巻のような熱風を感じた。塚田明との待ち合わせ場所は、雑居ビル地下の小さなスナックである。カウンターだけの狭い店内だが、落ち着いた大人の雰囲気は漂う店であった。そのカウンターの一角に、二十四年前の同級生がいた。

「やあ、むつき。懐かしいなあ…。さあ、座れよ」

その笑顔の感想は語るまい。老けたのはお互いさまだ。妙にテカるオールバックのヘアスタイルと、けばけばしいネクタイ、ピンクのワイシャツ。さらに染み付いたタバコの臭いが、わたしの記憶に残る初々しい少年の姿を完全に抹消する。そんな中年男の塚田明は、わしの着席を待ち生ビールを注文した。早速喋り始めるが、同級会はわたしを誘い出す方弁だったとすぐに気付いた。僅か4〜5分話しただけで、塚田は話題を変えたのだ。

「おまえの会社、カントリースピリッツってさ…この不況の嵐でも、けっこう頑張っているな」

「まあね…」

「別荘やログハウスの専門メーカーだったけど、最近じゃ建売住宅も広く手掛けているようじゃないか」

わたしは隣に座る男の横顔をちらりと見た。腹の内を探りたくても、小心者の平凡なサラリーマンにその勇氣はない。

「へえ、ぼくの会社に詳しいな」

と、答えるのが精一杯だ。塚田はタバコに火をつけ、煙の輪を低い天井に吹き上げた。

「俺さ、フリーのライターなんだ。今、ある特ダネを追っている。物凄い特ダネさ。それに、おまえ